ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples

仮面
イヌイト
アラスカ
高さ　43.2cm

北方民族博物館だより
−第26号−

講座「博物館学研究会　— ビジタースタディ —」
小学校団体の博物館利用を考える　2
参加報告　日本民族学会　4
講習会「Sodachi隊・自然の中で遊ぼう!!」　5
おしらせ　第12回特別展
News　6

5月15日

平成9年度第1回講座

博物館学研究会　―ビジタースタディ―

小学校団体の博物館利用を考える

発表者　黒川　郁氏　（財団法人北海道開拓の村）
増田　泰氏　（斜里町立知床博物館）
笹倉いる美　（当館）

5月15日に講座「博物館学研究会　―ビジタースタディ―　小学校団体の博物館利用を考える」を開催し、近隣の博物館関係者約20名が参加しました。

昨年の博物館学研究会では、参加者各自の勤務する博物館の来館者データの比較検討を行い、また博物館運営の課題やその後の方向性について議論しました。

今回は、昨年度の成果をふまえ、来館者（ビジター）の中でも、特に小学校団体に焦点をあて、学校団体で博物館を利用するこどもたちが楽しく学習できる博物館づくりについて考えることを目的としました。

まず3件の事例発表を行ったあと、ディスカッションに入りました。

＊　＊　＊

◆事例発表1　北方民族博物館　笹倉いる美

近隣博物館を対象として行ったアンケートから、常設展示総観覧者数に占める小学校団体の割合（平均平成7年度15.8%、平成8年度14.7%）や、利用している小学校団体が地元の小学校であるのか、それとも遠方からの利用であるのかがわかった。この数値は常設展示の観覧者数に限っているので、その他の博物館活動（体験学習など）の利用者は含まれていない。

北方民族博物館の小学校団体の入館者数は、釧路・根室管内からの修学旅行による利用が増えているものの、全体としては平成6年度をピークに減っている。

平成7、8年度に北方民族博物館を利用したすべての小学校に対し「小学校が博物館での学習をどう考えているのか」と「小学校団体の博物館利用が総体的に減っていることの理由」を知るためにアンケートを行った。北方民族博物館にかぎらず博物館の利用そのものは減っていないという回答は予想外であった（回答61校中、増えている2校、減っている3校、変わらない56校）。要望としては、博物館の案内書の作成・配布、体験学習、観覧料の免除などが多くあげられた。事前準備、事前学習については、旅行会社にまかせている、特に何もないという回答も多くあった。

北方民族博物館ではオリエンテーション、体験学習、各種印刷物の作成などを行ってきた。しかし、広報不足等から北方民族博物館の活動内容に対して学習目的が適当でなかった学校もあり、事前打ち合わせにより適切な助言を行っていくことが今後の課題である。

◆事例発表2　(財)北海道開拓の村　黒川郁氏

北海道開拓の村では、学校教育の中で開拓の村での効果的な学習を図るために、「小学校3、4年生向けの学習のしおり」を作成した。作成にあたっては、その場で見て課題や設問について考える事ができるようにした。この学習のしおりは学校側の評判はよいが、そのままコピーして使われてしまう場合もあり、開拓の村としては、各学校がこうしたしおりを参考に独自のものを作ってもらいたいと考えている。また、小学生向けにつづき、「中学生向け」を作成した。学習帳を作るための資料集のようなものがほしいという学校側からの要望に応えたもので、開拓の村にある約60軒のすべての建物のデータ集でもある。

学校との事前打ち合わせは、以前は総務課（事務職員）が対応し、集合や食事の場所など主に施設面について行っていたのを、学芸員が対応して、学習内容についてもっと打ち合わせするようにかえた。なるべく下見に来村してもらうように話しているが、遠方の学校の場合はなかなか難しいので、電話、ファクシミリのやりとりのあと、学校セット（見学届け用紙、リーフレット、学習のしおり等）を送付している。気になるのは、学校からではなく旅行会社が連絡をしてくることである。

開拓の村では体験学習のメニューもいくつか用意しており、これらを希望する学校も増えている。スペースや時間などの点で制限もあるが、できるだけ対応していきたいと考えている。

◆事例発表３　斜里町立知床博物館　増田泰氏

斜里町立知床博物館は、町内の小学校団体の利用率が高い。また、博物館内での展示見学等だけではなく、博物館の建物を離れた場所でも“博物館”が活用されていることが特徴である。

博物館内では、展示見学とソバ作りなどの体験学習を行ってきた。展示見学では、要望があれば学芸員が対応して、館内の説明なども行っている。これらの団体利用を次の個人利用につなげるところに学芸員の腕のみせどころがあるのではないか。問題点としては、こどもたちが作業できるような大きな部屋がないことや、学校のカリキュラムに融通性がないこと、また町内とはいっても博物館へ来るまでの交通手段の確保が難しいことなどがある。

博物館を離れた場所での活動では、学校周辺の自然観察会、空き教室を利用した移動博物館、遠足（自然観察会）での指導・解説、天体観測などを行っている。

博物館利用を呼びかければ当然学校側の要望に応えなければならないが、知床博物館の現状として、今以上の量的な対応はできない。質を保つためには、モデル校を絞らざるをえない。また、学校とのつながりが担当者との個人的なものであると、担当者の異動によって関係をまたはじめからつくることにもなりかねない。そうした点でＰＴＡも一緒になると、地域とのつながりもでき、そのことが資料収集や情報提供など博物館の諸活動の助けになることがある。

共に取り組むという意識が博物館側、学校側の両者にないと、時間の経過とともにマンネリ化することにもなる。こども、先生、学芸員がみな楽しいという状況を作ることが大切である。

＊　＊　＊

ディスカッションでは、参加博物館のそれぞれの小学校団体の利用状況について説明をいただきました。学校ではカリキュラムに余裕がなくなっているが、そうした中でももっと活用してもらうよう、博物館ではこのようなことができる、博物館はこんなふうに使ってもらいたいという呼びかけを、博物館側からしていかなければならないのではないかという意見が出されました。

この講座の企画は、こどものときから博物館で楽しみをみつけ、何度も博物館を利用してもらうにはどうしたらよいのだろうかということからはじまりました。これには、今の博物館が本当にこどもたちにとって、楽しさをみつけられる場所になっているのだろうか、もしかしたらつまらない場所だという印象をもって帰っているのではないかという反省があります。

北方民族博物館では昨年度末に小学校団体向け利用案内を作成し、広報に利用しています。また、団体利用受付用紙の改訂を行ったり、学校との事前打ち合わせを増やすなどして、よりよい博物館学習を考えていこうと思います。

これからも本講座のような博物館利用について意見を交換する場を持ち続けたいと考えています。今回は博物館関係者だけでしたが、もっと広く参加者をまじえることができればとも思います。

学校向け資料を作成している全国の博物館に寄贈をお願いしたところ、たくさんの資料を送付いただきました。アドバイスが書かれたお手紙がそえられていたこともあり、大変参考になり、また心強く思いました。心よりお礼申し上げます。

（学芸課　笹倉いる美）

第31回　日本民族学会研究大会

於：大阪府吹田市

第31回日本民族学会研究大会が国立民族学博物館を会場に5月21日・22日の日程で開催されました。今回の個人発表は昨年度に比べ25％ほど多くなっていましたが、これには昨年度まで行われていた日本人類学会・日本民族学会連合大会が発展解消された影響もあったのではないでしょうか。ちなみに6つのグループ発表の各報告を含め、全発表136のなかで北方民族博物館の対象とする地域／民族に関係する発表は11と、全体の8％にすぎませんでした。

これらのなかで、北方諸民族に関係する3つの個人発表と当報告者らのグループ発表について報告します。

＊　＊　＊

■「日本人によるオロチョンに関する民族学的報告について（2）」

最近、観光と地域社会・経済・文化との関係が人類学／民族学的関心の一つになっているが、東北大学の佐々木亨さん（元当博物館学芸員）は、旧満州において1930年代から40年代初めにかけて、オロチョンとその居住地域が観光資源としてとらえられ、観光産業が成立していたことを報告した。

■「ポスト・ソビエト期におけるシベリア・トナカイ飼育業の再編過程」

東京都立大学大学院の高倉浩樹さんは、ロシア連邦サハ共和国のヤクート、エヴェンによるトナカイ飼育経済についての現地調査から、ソ連崩壊後の経済システムの変化にともなうトナカイ飼育組織の社会経済的変化の過程を報告した。

■「カナダ・イヌイット社会の変化について」

国立民族学博物館の岸上伸啓さんは、カナダ東部ハドソン湾東岸のイヌジュアク村の事例をもとにしたイヌイト社会の変化と持続性の検討から、先住民社会のおかれる条件によって、外部の影響があっても先住民独自の社会経済関係を再生産し持続することができるとする見解を示した。1970年代にハドソン湾南部のジェームズ湾東岸に水力発電開発が計画されたことを契機に、北ケベックのイヌイトやジェームズ湾東部のクリーは、ケベック州および国家に対し土地利用に関する先住権を要求し交渉に入った。その結果「ジェームズ湾および北ケベック協定」が締結され、イヌジュアック村を含む地域の先住民は政治、経済、社会的な権利をある程度獲得することができた。なかでも狩猟者支援プログラムは、経済的意味を失いつつあった生業活動の再開／持続そして食料分配の持続にも大きな役割をはたしてきた。このような事例の分析から、先住民社会が国家や世界システムに取り込まれ、政治経済的に国家や国民経済に依存しようとも、先住民との協議によってつくられる政策と先住民自身の主体的、能動的なはたらきかけがあれば、先住民社会の社会経済関係を再生産し持続させることができると結論づけている。

■グループ発表「北方先住民社会における資源の利用と先住民の権利－とくにサケ類について－」

本グループ発表は北海道東海大学の岡田淳子さんをコーディネーターに、岡田淳子「アラスカ海岸部先住民のサケ利用」、岩崎・グッドマン・まさみ（北星学園女子短期大学）「カナダ先住民族によるサケ漁」、齋藤玲子（当館）「アイヌのサケ利用」と渡部裕（当報告者）「アイヌ社会とサケ類の捕獲－商業捕獲・捕獲規制の影響－」、そして野本正博（財団法人アイヌ民族博物館）「現代に生きるアイヌのサケ利用文化」の報告があった。各報告は、アラスカ・カナダ先住民そしてアイヌのサケ類に関する利用、商業捕獲や国家の規制による先住民への影響、サケ類捕獲・加工の構造的変化、資源利用に関する先住民の権利の在り方・歴史的変遷、サケ儀礼の復活と伝統文化や漁業権についてであった。これらの報告に対し国立民族学博物館の秋道智彌さん、岸上伸啓さん、一橋大学大学院の渥美一弥さんのコメントを予定していたが、運営の時間変更などから渥美さんを除くお二人のコメントをいただくことができなかった。渥美さんは、サケを取る伝統的な網漁を精霊から授かったという神話をもち、サケと深く結び付いていた北アメリカ北西海岸のバンクーバー島南部のサーニッチの例を述べられた。

（学芸課　渡部　裕）

講習会

6月14日

Sodachi隊

自然の中で遊ぼう!!

講師　笹倉いる美（当館）

6月14日に「Sodachi隊・自然の中で遊ぼう!!」（網走青年会議所主催、道立オホーツク公園・北方民族博物館共催）を道立オホーツク公園にて開催しました。

Sodachi隊は、普段あまり接することのない、別々の学校に通う広い年齢層のこどもたちが集まって、いろいろな体験を行うというもので、網走市内の小・中・高校生約40名がメンバーになっています。

当館担当部分では「火おこし」と「やり投げ」を行いました。

「火おこし」では、班ごとにわかれて協力しながら、舞錐（きり）式、弓錐式、ひも錐式、錐もみ式の4種類を試みました。うまくこつをつかむのに時間がかかっている班もありましたが、皆真剣に、また楽しんで取り組んでいました。今回の参加者の中にはこれまでこうした火おこしを行った人はいなかったので、火が実際におきると大きな歓声があがっていました。

「やり投げ」は、当館が所蔵するグリーンランド・イヌイトのものをモデルに作成した投槍器（とうそうき）を使って行いました。道具を使わずに手だけで投げたときよりも威力がまし、また方向性も定まることを体験しました。今度展示室で投槍器を見たときには、どのように使われるものなのか具体的にイメージすることができるでしょう。

なお火おこしについては、日本のあかり博物館、浜松市博物館、美幌博物館に協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

おしらせ

第12回特別展

樺太１９０５－４５

―日本領時代の少数民族―

サハリンは、日本の北方に位置する、北海道とほぼ同じ大きさの島です。19世紀後半から今世紀にかけて、サハリンの領有権は日露間を揺れ動きました。そしてそれぞれの国家の領有政策によって、ニブフ、ウイルタ、アイヌなどサハリンの少数民族の生活は、大きく影響されてきたのです。

本特別展では、サハリンに暮らしてきた少数民族の伝統文化と、それらが日本領時代（1905-45）の定住化・同化政策の中で変化を余儀なくされた状況を、当時収集された実物資料や写真などによって紹介します。

開催期間：1997年7/19(土)～ 9/28（日）
休 館 日：毎週月曜日(9/15は開館)、9/16
観 覧 料：一般250[200]円　高校･大学生80[50]円　小中学生50[30]円([ ]内は10名以上の団体料金)

関連事業

■講習会『ウイルタのお人形づくり』
7/27(日)14:00-15:30 講師：北川アイ子（資料館ジャッカ・ドフニ）会場：当館講堂

■講演会『わたしのなかのサハリン』
8/2(土)14:00-15:30 講師：神沢利子（児童文学者）会場：当館講堂

■講座『サハリン少数民族の過去と現在』
ニブフの作家ウラジーミル・サンギ氏(サハリン州ノグリキ在住）をはじめとした5人の講師を迎え、日本領有以降のサハリン少数民族について検証します。
9/20(土) 13:00-18:00、21(日) 9:00-12:15 講師：ウラジーミル・サンギ氏（作家)、伊藤悟氏（北網圏北見文化センター)、河野本道氏（文化人類学者)、田中了氏(ウイルタ協会)、豊川重雄氏（札幌アイヌ文化協会）会場：道立オホーツク公園センターハウス

News

■寄贈資料紹介

○オットセイの胆のう

遠軽町の鈴木安太郎氏からオットセイの胆のう１点が寄贈されました。

○皮鞣(なめ)し具ほか

網走市の寺田弘氏から皮鞣し具６点、オットセイの毛皮４点が寄贈されました。

○皮鞣し台ほか

網走市の木原秀孝氏から皮鞣し具２点、鞣し台１点、鞣し台の部品１点が寄贈されました。

○写真

札幌市の納谷忠久氏から写真17点が寄贈されました。

■執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍（４～６月）

・小川正人　1997
『近代アイヌ教育制度史研究』
北海道大学図書刊行会

・風間伸次郎　採録・訳注　1997
『ナーナイの民話と伝説　３』
東京外国語大学

・木部与巴仁　1997
『伊福部昭音楽家の誕生』　新潮社

・谷一尚／工藤吉郎　1997
『世界のとんぼ玉』　里文出版

・森俊　1997　『猟の記憶』　桂書房

・由良勇　1995　『北海道の丸木舟』
マルヨシ印刷

■主な来館者（４～６月）

5/21　モントリオール大学教授
フィリップ・スミス氏、マックギル大学教授　井川史子氏

6/18　中華人民共和国駐札幌
総領事　羅　田廣氏
主席領事　劉　志堅氏

■その他の行事報告

4/26　博物館クラブ「オリエンテーションと楽しい切り絵」

5/5　こどもクラフト工房

5/10　博物館クラブ「イヌイトのおもちゃづくり」

6/28　博物館クラブ「サミのひも織り」

みんぞく
こうこ　　in HOKKAIDO
はくぶつかん　　（４～６月）

※このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

4/20　白老・アイヌ民族博物館で昨年12月に消失したポロチセ（大きな家）を復元／Ｙ

4/28　フランス東部ブザンソンの市立美術館で「アイヌ芸術品展」／Ｄ（夕）

6/1　縄文の海峡交流実感：三内丸山遺跡の出土品約300点を集め市立函館博物館で特別展／Ｙ

6/19　礼文「香深井５号遺跡」オホーツク文化末期の土器と擦文土器が出土／Ｔ

＊Ｄ：北海道新聞、Ｔ：北海タイムス、Ｙ：読売新聞
複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。

◇◇職員の異動◇◇

・転出（5/31付）
管理課係長　小田義人
（北海道教育庁生涯学習部文化課主査へ）

・転入（6/1付）
管理課係長　楠山尚己
（北海道教育庁企画管理部財務課主任から）

・退職（6/30付）
解説員　堂上恵美

・採用（7/1付）
解説員　本間　恵

☆観覧者動向（４～６月）

（名）

	常設展示
４月	１，４７１
５月	２，４３５
６月	３，６８２
計	７，５８８

§編集後記§

先日、名寄市で開催された道博物館大会に出席してきました。初日は講演やシンポジウム、２日目は近郊の博物館の見学会でした。こういう仕事に関わるようになってから、他の博物館に入るとどうしてもあら探しのような見方をしてしまいます。そうした見方も時には必要なのでしょうが、子どもの頃にワクワクしながら博物館に入った気持ちをなくさないようにしたいものです。（中田）

北方民族博物館だより
— 第　26　号 —
1997年７月10日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093　北海道網走市字潮見313-1
ＴＥＬ　0152-45-3888　ＦＡＸ　0152-45-3889